

原発という名の福音

—アーサー・ビナードさん講演
『三人寄れば《もんじゅ》を止める知恵』より—



以前、バイトで勤めていたMさんが、二人の息子さんを連れて本店を訪ねてくれた。聞くと、夕方から市内で行われる講演を聴きに来たという。「はるばる栗山町からお子さんを連れてまで、どんな話？」と尋ねると、原発について、何やら詩人の外人さんが話らしい。興味をそそられ、急遽出向くことにした。

4月26日は27回目のチェルノブイリデー。お昼のパレードや集会に引き続き、18:00から「かでの2.7」で講演が行われた。テーマは『三人寄れば《もんじゅ》を止める知恵』。講師はアーサー・ビナード氏。米国ミシガン州生まれで、大学卒業と同時に来日し、日本で詩作や翻訳を始め、中原中也賞や広島文化賞など受賞する詩人として活躍している。流暢な日本



語で時にユーモアを交えながら、シリアスなテーマを、真実を見つめる詩人の言葉で伝えてくれた。以下、彼の講演の要旨である。

初めて広島を訪れたのは、来日して5年ほど経った1995年。その時、平和記念資料館でたまたま原爆体験者と話す機会があった。彼らは原爆のことを「ピカドン」、あるいは「ピカー」と言う。その言葉との出会いが人生を変えた。核兵器という言葉を使っていた自分は、何も原爆のことを理解していなかった。今まで知っていたヒロシマと、現実とは違ったのだ。

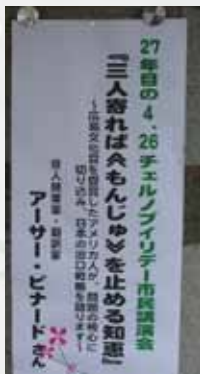
アメリカの高校生時代、「原爆は戦争を終わらせるために必要だった。日米とも死者を減らすことができた」と教えられた。「トルーマン（大統領）は、人命を重んじ、やむをえず2発、ヒロシマとナガサキに原爆を投下…。」やむをえず、2発？ やむ

をえず、1発なら分かるが、なんで2発？ その時ちょっとおかしいなと思った。広島に来て「ピカドン」と出会い、それまで信じていたことがすっかり変ってしまった。

「原爆」または「原子爆弾」という言葉は、上から見ている言葉だ。爆撃機から見下ろしている。そこには距離がある。「核兵器」はもっと離れている。エノラ・ゲイが出発した南の島、あるいはホワイトハウスあたりから見ている。そして「核兵器」という言葉を最も好むのがペンタゴン（米国国防省）だ。そこには生活者の視点が何も無い。「ピカドン」は、ヒロシマ、ナガサキの街の中に立って、熱線を浴びている人の言葉。「ピカドン」という言葉を為政者は好まない。原爆の体験を思い出させ、反原爆を人々に抱かせるから。「ピカドン」と「ピカーッ」との違いは何か。それは爆心地からの距離。「ピカーッ」と語るのは、爆心地近くの方々。光の直後の衝撃波で意識を失ったため、その後の「ドン」を聞いていない。

私は広島で生活し、原爆が必要だったという定説が真っ赤な嘘だと分かった。アメリカに行って親戚に「原爆は必要なかった」と話すと皆、怒り出す。

いったい政府がどのようにメディアを使って国民に伝えたか。戦争が終わり、国民の解放された喜びのタイミングを見計らって、「原爆のお陰だ」とPRしたのだ。戦争で傷つき、やっと開放されたその心に、ペテンがうまく入り込んだ。そんな叔父にヒロシマの真実を話すのは、あたかも手術でうっかり体に残してしまい、その一部になってしまったガーゼを、無理やり剥がすようなもの。だから彼に話すときは緊急手術の様にメスでスパッとやらなきゃいけない（笑）。



また、いとこのモリーに「えっ、ヒロシマって人が住めるの?」と聞かれたこともショックだった。

1945年、原爆投下によるウランの核分裂により、セシウム137、ヨウ素135、ストロンチウムetc…。それらの放射性物質が広島を覆った。ヒバクには、爆と曝がある。8月6日の夜に家族を探すため市街地に入った人が、それらの放射性物質により入市被曝した。

いったいいつ、広島に人が住めるようになったのだろうか。米軍のデーターを調べたが、秋口以降のものしか出てこない。しかも放射能の数値はすでに低い値しか記録されていない。

中国新聞を8月1日から一日ずつ調べた。9月17日、枕崎台風（伊勢湾台風に匹敵）が上陸。長崎、広島に大雨を降らし、広島の街が大洪水に見舞われた。それにより、残留放射性物質が川から瀬戸内海に流されたのだ。一般に「除染」という言葉が使われているが、それは不可能。実際には放射性物質は「移染」しかできない。広島にしても、福島にしても、海に流してごまかすことが「除染」の実態だ。現在やっと広島は被爆当時から8分の1になったところだ。

なぜ、長崎、広島だったのか。本当は京都が目標だったといわれている。それを陸軍長官だったヘンリー・スティムソンが強硬に外した。「貴重な文化財を守るため…」というのが定説になっているが、真実は違う。

マンハッタン計画（原爆開発）はそもそも違法だった。しかも、パールハーバー開戦以前から始まっていた。それは20～50年後の世界支配を考えてのことだった。だから残留放射能の問題も大切な要素だったのだ。“よくできた嘘には、真実の取っ手をつけてある”という。スティムソンはなぜ京都を外したのか。京都は盆地なので除染（移染）ができない。海に流れないで、ずっと市内に残ってしまう。文化財は“取っ手”に過ぎない。広島、長崎は8月に落とせば9月に台風が来る。海沿いでしかも中央から離れているのだ。

ひとくぐりに原爆が語られているが、本当はヒロシマ、ナガサキは一緒にできない。ヒロシマ型原爆はウラン爆弾。原料であるウラン235は、もともとウラン鉱石から精錬されたもので地球にあった物質。しかし、プルトニウムはさらに人工的に作られた。それは1942年12月2日、シカゴ大学の実験炉で行われた核分裂からはじまった。これが実は「もんじゅ」につながっている。

実は、ヒロシマよりナガサキ型原爆の方がはるかに強力ですさまじい。ナガサキはプルトニウム爆弾だった。ウラン238に中性子を当てるとウラン239ができ、最終的にプルトニウム239ができる。マンハッタン計画の真の狙いはプルトニウム製造だった。ニューメキシコで1945年7月16日に行われたプルトニウム爆弾「トリニティー」による核実験が世界最初の核爆発。ヒロシマが大きく取り上げられナガサキがついでの様

そのプルトニウムを製造するための装置が必要だった。それには核反応を「ジリジリ」とゆっくり起こさせる必要がある。彼らは当初Pile（パイル）と呼ばれたその装置を、商品として売り出すことにした。カモフラージュとして湯沸し機能をつけた。核分裂で生じる熱を利用できたからだ。名前をNuclear Reactor（核分裂反応装置）に変えたが、本音は核開発だった。…それが原子炉（原発）である。

日本語に訳された「原子炉」という言葉はとても聞こえが良かった。炉は爐と書いた。爐は鉄鋼業の爐を連想させ、戦後復興に沸く当時の日本で、鉄鋼を否定できる人はいなかったのだ。原子



炉という言葉を発明した人間は天才である。それは日本語の最大のペテンではないか。

中 でも「もんじゅ」は特別。プルトニウムのグレードが違う。プルトニウムにも松竹梅がある。「もんじゅ」のそれは松の上。高速増殖炉はそのためにある。

これまで約 20 年で発電できたのはわずか 1 時間、それに 2 兆円かかった。しかし、目的が違うのだ。ちょっとでも動けば最上のプルトニウムができる。ナガサキ型プルトニウムである。何が何でも「もんじゅ」を維持したい理由はそこにあった。それは核開発の背骨なのだ。2 兆円はそのためであり、十分成功している。

さらに、このまま続けたい。青森県六ヶ所村は核製造場所も兼ねている。このまま続けるため、大間にフル MOX（すべての炉心にウランとプルトニウムの混合酸化物燃料を使う）原子力発電所を作っている。それらはカモフラージュ。もんじゅ一六ヶ所一大間が 3 点セットになっている。一番守りたいのはそれらだ。

どうやってこれから核のペテンと向き合っていくべきなのか。

まず、大間を作らせないこと。日本の核が行き詰まるとアメリカも行き詰る。日本から資金提供しているから。原発を作っている日本企業を、ただの企業と認識してはいけない。政府は日本のことをなんとも思っていない。

次に大切なのは第 5 福竜丸事件。1954 年 3 月 1 日、ヒロシマの 1,000 倍の水爆 6 発で被爆した。それで、「核の平和利用」のおかしさに気づいた。アイゼンハワーが 1953 年 12 月にホワイトハウスで核の平和利用を演説。その 3 カ月後の事件だったのだ。しかも、日本では正力・中曽根により、第 5 福竜丸事件の直後の 1954 年 3 月上旬に核開発が予算化された。核の平和利用は「平和をへとも思わない利用」なのだ。平和利用という名の悪質なペテンだ。

第 5 福竜丸を知ることが大切。真実を見抜くこと。ペテンの定説を飲み込んだままじゃだめ。脱原発じゃだめ。本当に終わらせる必要があるのは核分裂。

それは暴力ではなく、皆の持っている言葉の表現力で可能なんだ。



福島原発事故の予言と
言われている詩がある。1994 年に福島県原町市（現南相馬市）在住の詩人、若松丈太郎が発表した「神隠しされた街」。3.11 で福島に起こったこと、その後の 2 年が書かれている。その彼が震災後に書いた

「ひとのあかし」という詩がある。最後にそれをお伝えしたい。これらの詩は、人間の“見抜く可能性”を教えてくれる。

「ひとのあかし」

若松丈太郎

ひとは作物を栽培することを覚えた
ひとは生きものを飼育することを覚えた
作物の栽培も
生きものの飼育も
ひとがひとであることのあかしだ
あるとき以後
耕作地があるのに作物を栽培できない
家畜がいるのに飼育できない
魚がいるのに漁ができない
ということになったら
ひとはひとであるとは言えない
のではないか

（講演要旨ここまで）



『さがしています』
アーサー・ピナード著
岡倉視志 写真 童心社刊



『ひとのあかし』
若松丈太郎 詩
アーサー・ピナード英訳
清流出版刊

.....

会場を出て歩きながら考えた。今聞いたことは本当なのだろうか…。

それが本当かどうかは分からない。また、彼の言うことを信じる必要もない。

では、政府の言う事が本当なのだろうか。しっかりと対策をとれば、原発は安全で、再稼働や新規立地も全く問題ないのだろうか。この先大きな地震が来ないという確証も無く、いずれ数十年後、すべての原発は老朽化により廃炉せざるを得ない。廃炉にかかるコストはどうなっているのだろうか。危険な廃棄物はどこに行くのか。電気は本当に不足しているのだろうか。震災直後の大本営発表で、真実は話されただろうか？許容される放射能の数値は安全なのだろうか。政府の言うことは、今もこれからも、本当に正しいのだろうか？

ひとたび破壊されたら、極めて有害な放射性物質の拡散を抑えることも、消し去ることもできないものを、どうして使い続け、輸出までするというのだろう。自然なくては生きられないのに、あたかも原発や現代の快適な文明生活こそが生きる全てとも思っている我々の有様はどうしてなのか。

もし、彼の言うことが本当だったらどうだろう。北朝鮮に核施設を作らせない目的は何か？なぜ、日本やアメリカは良いのか？その理由があぶりだされてくるようだ。もしかしたら、マンハッタン計画の真の目的は今も生きているのではないか…？

帰り路、きらびやかに光り輝く地下街を、笑顔で行き交う若者たち…まるでそれが虚構の様に感じられた。何も知らず、何も考えないで生きる方が、幸せなのだろうか。真実の光は何を照らし、私たちをどこへ連れて行こうとしているのだろうか。

少なくとも今、私はアメリカ生まれの詩人が語った、一瞬の強い光に照らされて、これまで見えなかった暗闇の一部を見せられたのだ。

「感じる事が大切だ」と詩人は言った。核について感じる事、核で焼かれた街や人々について、人が人を合法的に殺す戦争について、感じる事。そこにもし身近な愛する人がいたら…。それを感じる事。そして何よりも、自然のこころを感じる事…。

自然は人の思惑や想定など、いとも簡単に超える。その力の前に、そして私たちを育む自然そのものに、私たちはもっと謙虚であらねばならない。

それはけっして綺麗事ではない。むしろ死活問題ですらある。これ以上の核（爆弾・原発）や戦争による人災は、自然にとっても人類にとっても、致命的なダメージを与えるだろう。このまま自然を破壊し続けても、争い続けても、人類は生き残ることができないことを、私たちは、はっきり知らねばならない。

彼が言うように、脱原発でも、また反原発だけでも足りないのかもしれない。反対だけでは相手側の力をも強めることになる。では、平和推進運動だったらよいのだろうか。

もしかしたら、それですら十分ではないのかもしれない。「平和」という言葉に安住するのではなく、もっとリアルに、「本当の平和」とは何か、私たちの望む状況をイメージする必要があるのではないか。

正義も悪も、もともと一つのものの裏表なのだ。そして、すべてはつながっている。私たちはひとつであり、創造主の一部ではないだろうか。

だとすれば私たちは創造主として何を生み出し、何を受け取ろうとしているのだろうか。

何が現実で、何が真実か。

私とは何で、私たちはどこへ行こうとしているのか。

「原発」という名の福音が、人々を真実への目覚めへと誘ってくれている気がしてならない。

それは私たちの意識を変え、世界を変える強力な触媒なのかもしれない。

(編集部 島田 浩)

